哲学Ⅰ（月３，石原孝二先生）試験対策プリント

１．「心」の定義とは何か？

①日本語

　「心」…人間の内臓の通称となり，さらに精神や人間の内面の意味となった。「からだ」や「もの」と対立する概念である。

　「魂」…民族宗教や儒教，仏教の影響が複雑にからんでいるが，アニミズム的である。死後の霊魂は，お盆や正月になると身近に帰ってくると信じられている。

②英語

(1)Spirit,mind⇔body

(2)thought,will=思考，意思

(3)mood,feeling=気持ち，心情

③聖書における定義

1. 心【へ】leb【ギ】kardia【英】heart【独】harz

生きる力を指し，感情や恐れ，勇気，知的活動，記憶，理解力の座である。要するに，人間の本質と特性をまとめていう概念のこと。

(2)魂【英】soul【独】seele

【ヘ】nepes…もともとは「のど」「首」を意味し，そこから「息」「気息」を意味するようになった。息は生きているものと死んでいるものを区別するから，「生命」という意味に至る。ただし，これはあくまで常に身体と結びついた生命であり，死とともに消滅する。

【ギ】psuche…人間そのものが魂とよばれる。死後，一時的に身体から離れ，最後の審判で肉体とともに復活する。

④古代インド

　ヴェーダ聖典（BC1200~500頃，最古の文献思想といわれる）には，輪廻思想が形成されている。輪廻思想とは，人間の肉体は死とともに滅するが，その霊魂は不滅であり，別の身体に入ると考えることである。ウパニシャッド（奥義書）では，輪廻からの完全な解放，すなわち解脱が最終目標となる。

⑤古代中国

霊魂を，精神的活動を司る陽の霊気の「魂（こん）」と，肉体的活動を司る陰の霊気の「魄（はく）」に分けて理解した。霊魂は，時に生きている人の身体から遊離して他の人や動物に憑依することもあり，また夢も霊魂が遊離することで起こる現象だと考えられた。

２．現代に心の定義とは？

①経済学

　自己利益を追求する利己主義者(＝合理的な愚か者)という特定の人間観をベースにしている。市場での選択行動が，選好の顕示とみなされ，行動の原理は「効用の最大化」だとされる。

②法律学

　刑法39条は，心の機能には障害が起こりうることを前提としている。

③適応論的アプローチ

「心」を，社会環境に適応するための道具であると理解する。

３．「心の座」は心臓にあるのか？脳にあるのか？古代から近代の哲学者の考え方色々

・共通点→人間（動物）が生きている＝身体の中に心（魂）がある。

Cf.現代の「脳死」＝意識の不可逆的な消滅を死とみなす

・対立点１，身体と魂の分離は可能か？

可能→輪廻思想など

不可能→死後の世界はないと考える

・対立点２，心の座はどこにある？

心臓→ウパニシャッド，アリストテレス

脳→ヒポクラテス（学派），プラトン，ガレノス，（デカルト）

1. プラトン

身体は，魂の墓場である。魂は，神（万物の創造者）から与えられた，不滅のもの。

神は神々に魂（不死）を与え，神々は身体（死すべきもの）をつくってあちこちに魂を入れた。

頭→理性，（理性を守るため頸をつくる）胸→勇気，下腹部→欲望

頭が一番大事な，心の座である。

1. アリストテレス

魂＝可能的な生命の形相

身体＋魂→生命

※質料（木材）＋形相（家の形）→個体（木造住宅）

身体と魂は，区別はできても分離はできない。

心の座は心臓にある。ただし，例外として理性（純粋な思考）だけは，神的，永遠なものだとして，身体とは無関係とした。→死すべき人間が理性を通じて神に近づける！

1. ガレノス

古代ローマの医者。解剖の祖。

神経はみんな脳につながっているから，心の座は脳にある。

1. デカルト

『心身二元論』

［心身二元論が導かれる過程］

方法的懐疑＝本当は疑わしくなくても，ひとまず疑ってみる

例えば，確実だと信じていた「感覚」は，錯覚という現象がある以上，不確実である。

一般化すると，世界は存在しないかも。だけれど，こうやって疑っている自分の存在（＝実体）だけはどんな疑いに対しても決して揺らぐことはない。

『我思う　故に我あり』＝cogito ergo sum

※「実体」とは？

存在するのに他のものを必要としない。

精神（私を私たらしめるもの）と延長（物体の実体）が，実体である。

対義語:「属性」

　　　　存在するのに，他のものを必要とする。色や重さなどの性質etc

身体と精神をつなぐものは，「松果腺（脳にある）」である。

cf.松果腺の本当の役割…メラトニンの分泌

※精神と物体の関係は？

1. 相互作用説…心の動きと身体の状態は，相互作用をおこす。

デカルトの松果腺説は，これの一種である。

1. 随伴現象説…身体（脳を含む）の状態が，心の動きに影響をおよぼす。
2. 平行説…身体と心は無関係。

cf.機会原因論…身体の変化をきっかけにして，心の状態を神が変化させる。

４．脳の機能は，局在(localization)か，全体論か？

(1)ガルの骨相学（18世紀末）

性格特性と，大脳表面の特定の領域は，一対一対応している。そして特定の領域が発達すると頭蓋骨が隆起するため，頭の形から性格がわかるとされた。

→科学的根拠を見出すことができず，否定された。

1. ブローカ，ウェルニッケらによる大脳機能局在説
2. ブローカ（フランスの医師）…失語症（発話障害）の患者を研究し，脳のある特定領域に障害を発見した。
3. ウェルニッケ（ドイツの病理学者）…失語症（感覚性失語，発話は可能だが聴覚的理解ができない）の患者を研究し，脳のある特定領域に障害を発見した。
4. ブロードマン…大脳皮質地図を作成。脳細胞の形や大きさ，密度により，1~52の領域を区分した。

Ex.ブローカ野（44・45）…運動性言語，ウェルニッケ野（22）…感覚性言語

→言語を含む高次精神機能は，大脳皮質の特定部位に局在するという大脳機能局在説が台頭してきた。

1. 現在の学説

「高次精神機能は，様々な領域のネットワークによって実現する」と考えるのが妥当である。

５.哲学史の流れ

(1)大陸合理論

デカルトやライプニッツが唱える。

「生得観念」…ひとには生まれながらに持っている観念(idea)があり，それによって数学的知識や合理的推論ができるようになる。

(2)イギリス経験論

ロックやヒュームが唱える。生得観念の否定。

知識の源泉は，感覚的な経験と反省によるものとした。

※ヒュームの「自我論」

・自我とは「知覚の束」であって，常住不変のものではないから，不滅の心（魂）は存在しない。デカルトが唱える，実体としての精神を否定した。

・因果性（原因と結果）の観念は，ある出来事が継起し，習慣となることで作られる。

Ex.雲が出る→雨が降る…「→」に必然性はないけれども，今までの習慣からそう思う。

(3)カントの超越論的哲学

大陸合理論とイギリス経験論の統合である。

（生得観念の否定，自然法則（因果性）の必然性，知識の源泉としての経験）

人間にはもともと先天的（アプリオリ）に，経験論的な能力（感性=感覚的能力）と合理論的な能力（悟性=分析・判断能力）が備わっている。

［対象の認識手順］

対象に触発され→感性が感覚的に対象を捉え→諸現象があらわれる→悟性がとらえたものを分析・判断し総合する→経験という対象の認識になる

つまり…

・感性でとらえられないものは，悟性に回せないから，認識できない。

・あらゆる認識は「私」の判断によるが，「私」は論理的なものではないから，デカルトの精神論は間違っている。

６．心理学の成立

(1)心理学成立以前

①イギリス

「連合心理学」…観念の連合

②ドイツ

「感覚研究」…感覚の定量的研究

1. アメリカ

「精神哲学」…ジェームズランゲ説（「悲しいから泣くのではなく，泣くから悲しいのだ」）

→心理学が独立した学問として，成立することを主張

(2)ヴントの実験心理学

被験者の報告にもとづく「内観」に依拠する。

→主観的，要素主義であると批判される

(3)行動主義，末梢主義

ヴントの内観法を否定し，行動の観察を通じて人間の心理を探求する。

(4)ゲシュタルト心理学

個々の行動ではなく，全体を重視する。

①メロディーの研究

メロディーは，流れでとらえるものである。ばらばらの音符では意味がつかめない。

②仮現運動

光の点滅ではなく，動きとしてとらえる。

(5)フロイトの精神分析学

フロイトは，人間の精神を「意識」「前意識（普段意識されてはいないが，意識にのぼらせることはできる）」「無意識（例えば，抑圧された欲望）」にわけ，「無意識」が「意識」に影響を与えていると考えた。

内観法は，意識にもたらされたものしか扱えないから，否定した。

７．現象学の展開

(1)フッサール

現象学の創始者

※現象学とは何か？

世の中を，意識に現れる現象だけからとらえる哲学。

Cf従来の哲学は，物自体（経験できない領域）を客観的に認識しようとしたが，フッサールは，各人の主観を通じて世界を客観的に認識するのは不可能だと考えた。

※フッサールの「志向性」の概念

私（純粋自我）は，さまざまな体験をするが，すべて同一の対象に向かっている=志向性

Ex体験１「タバコの缶の表面を見る」　体験２「タバコの缶の側面を見る」…

体験は異なっているが，すべて同一のタバコの缶を知覚している。

つまり…

意識の（能動的な）作用が，対象を構成（=志向的体験）する

志向的体験は，モノだけではなく，他者（他我）にもあてはまる。

※「他我論」とは何か？

私が見ている世界に，「自分の身体と類似した」外的物体を見つける→それは「私とは異なる，他の世界をもつ身体」であると，外的物体に意味づける→私の身体とともにある「私の心の領域（欲望，信念，思考etc）」が，他の世界をもつ身体にも存在すると考え，「感情移入」を行う。

※「感情移入（empathy）」とは何か？

外的に示されたもの（根源的呈示，他者の身体）の意味を構成して，意味を付与する。

他者の身体，私の心→現前しているから，直接把握できる

他者の心→感情移入によって間接的に把握する（付帯現前）

(2)ハイデガー

現象学と解釈学の統合を目指した。実存主義・実在思想の代表的な哲学者。

※「現存在」…われわれがそれであるところの存在者。自己への理解には，実存から理解する本来的なものと，世間に従う非本来的なものの二種類があるとした。

本来的自己＝様々な有意義性・可能性の根拠となる，自己の有限性（つまり，死）を自覚していること。

※「先駆的決意性（死への決意）」…死に対する非力さ，被投的根拠（自分は死というものに投げ入れられている）を自覚すること。

←→非本来的自己＝世間（匿名の他者，das Man）に従う。→責任が不明瞭

ハイデガーの考える自己＝西欧の伝統的な考え方である「魂の永遠性」を否定した。

(3)サルトル

　即自（物）は自己同一性に結びつくが，対自（意識）は自己とは一致せずに絶えず変化しているものと考えた。→自己とは，常に様々なことを考えていて絶えず変化しており，理想とは一致しない。

『実存は本質に先立つ』＝「人間の存在は規定性に先立つ」という意味。

→デカルト的な，実体としての精神を否定した。

(4) メルロ・ポンティ

フッサールの意識を重視する現象学に対し，対象構成における身体の役割を主張した。→ゲシュタルト心理学の，全体を重視する姿勢に似ている。

※フッサール:意識が対象を構成する←→メルロポンティ:対象を構成するには身体が重要。

「図と地」（ルビンの壺＝図と地を同時に捉えることはできないが，どちらか一方だけを見てもそれは全てを捉えたことにならない）

図と地が交代する＝アスペクト（相，姿，局面）の変換

図…実際の行動

地…①物理的空間

　　②身体図式（様々な感覚によって作られる身体）

　　　例えば，視覚と聴覚の関係，自分の手と足の位置関係など

例）チョークとは何か？→黒板に字を書くもの

このような理解をし，また実際に行動するためには，身体図式の役割が重要である。

８．脳科学の現在（資料９）

(1)脳機能の可視化，脳機能イメージング（画像化）

①PET　1970年代に導入された。脳機能そのもののイメージングをはじめて可能にした技術である。しかし，放射性物質を用いるため侵襲性があることが問題点。

②fMRI　1990年代に導入された。BOLDコントラスト（血液の酸性度を測ることで，血流の変化を計測できる）とよばれる脳血流の特性を利用→侵襲性がないため，健常者にも使用することができる

PET，fMRIともに，生体の脳の活動をリアルタイムで，反復可能に可視化→心的プロセスの神経基盤を解明することができる（認知神経科学）

※問題点…「脳神経神話」脳イメージング技術のインパクトに対する過剰な期待

→現代における「骨相学」の復活になりかねない

(2)脳の活動に介入する技術

①BMI（ブレインマシンインターフェース）技術

　＊１　コーディング（信号化）

　　　　例）人工内耳（音声をデジタル信号に変換し，聴覚神経を刺激する）

　＊２　デコーディング（信号の解禁）

　　　　例）四肢麻痺患者の支援装置（脳信号を解読し，機械を操作する）

BMI技術は，感覚機能の債権や運動機能を失った患者の意思伝達補助ツール，脳障害による機能の回復など，医療目的での利用を目指すものが多い

②DBS(Deep Brain Stimulation)

脳深部に電極を埋め込み，電気刺激を行う→パーキンソン病の治療，難治性うつ病（薬が効かないうつ病）に効く？

③神経の補綴（ほてい）

BMI技術のひとつ。損傷した中枢神経のニューロンを，人工ニューロンで置き換える

→人工海馬がつくれる？！

(3)脳（心）をつくる技術＝人工知能

①初期の人工知能（1950年代～）

「記号計算主義」…心は記号処理にすぎない。だから適切なプログラムを作れば，それがすなわち心になる。

結果：うまくいかなかった。

②ニューラルネットワーク（コネクショニズム）（1980年代～）

脳神経のネットワークを，人工ニューロンを用いて再現する（詳しくは後述）

※構成論的アプローチ

　ロボットを作ることによって，人間の脳（心）を理解しようとする。

ロボットは身体を持つから，環境とのインタラクションがある→ロボットと人間の比較が可能になる

９．心と脳をめぐる諸理論

(1)サールの考え（ 弱いAIと強いAI）

①1980年以前

心（知的能力）は単なる記号処理にすぎないものだと捉える古典的AI（記号計算主義）が主流

②1980年　サールの論文

×「強いAI」…人間の知的能力を再現する適切なプログラムは，それ自体が心である

○「弱いAI」…コンピュータは人間の心の一部をシュミレーションできるにすぎない

※「中国語の部屋」（思考実験）

中国語話者⇔中国語を理解しないが手引き書を持っている人（部屋の中）

　部屋の外からは，部屋の中の人が中国語を理解しているように見える（実際は理解していない）

同様に

人間⇔コンピュータ（ロボット）

　一見，コンピュータは人間の質問を理解して，適切に答えているようである（実際は，統語論的な記号操作をしているだけ）→コンピュータは意味の理解を欠いている

サールによる心とプログラムの違い…「意味の理解をする」「志向性を持つ」「クオリアを持つ」のが心，持たないのがプログラム

この違いは，ハードウェアが脳であるかそうではないかによる

③では，心的プロセスは脳科学によって解明されるか？！

サールは解明できないと考えた。

心的プロセス=脳内プロセスによって引き起こされるが，それに還元されない

(2) 心脳同一説

①タイプ同一説（還元主義）

ある特定のタイプの神経状態には，必ず特定のタイプの心的状態が対応する。

→心は脳に還元される

②トークン同一説（機能主義）

ある心的状態には，必ず何らかの物理的状態が対応するが，ある物理的状態から心的状態を完全に予測することは出来ない

→「多形実現可能性」（複数の様々な物理的状態からひとつの心的状態のタイプになりうる）がある

(3) 消去主義

　心的事象（心的プロセス）はそもそも存在せず，物理的実存が全てである

Cf行動主義は，消去主義の一種である。

(4)モジュラリティ（資料１２）

認知能力を構成するのは，一般的能力ではなく，相互に独立した様々な専門的能力の集合である，と主張する。

モジュール＝専門的に分化した能力の単位（？）

※脳がモジュールであることの特徴

＊１　領域限定的

＊２　ニューロン的構造として生得的に組み込まれている（局在説？）

＊３　自動的・自律的に作動する

＊４　モジュール同士が独立していて，それぞれの情報にアクセスできない

１０．神経細胞のしくみ

(1)シナプスの結合の可塑性

シナプスの生成・消滅や，結合の強度は，刺激のパターンへの反応として変化する

(2)閾値

静止電位…－７０mV

活動電位の発生（電位が閾値を超えると発生する）=興奮の伝導

１１．コネクショニズム（ニュートラルネットワーク）

生体ニューロンを模倣して，人工的につくったもの

「ユニット」…生体ニューロンにあたる

「結合」…シナプスの結合にあたる

※初期モデルでは，他のユニットから情報を入力し，活性化関数により閾値を決定したあと他のユニットに信号を出力し，他のユニットとの「重み」（シナプス結合の強度の違いにあたる）が，学習によって変わるような仕組みになっている。

　実際の生体ニューロンは，このような直列的なしくみではなく，同時に様々な情報を処理する並列的・分散的なしくみになっていて，これを「並列分散処理モデル」と呼ぶ。

１２．カントの超越論的哲学（補足）

　カントの言う「アプリオリ」…論理上経験に先立つという意味，経験の形式が前もって決められていること

例）明日の天気は，実際には明日になってみないと経験できないが（アポステリオリ），明日の天気は，晴れ・くもり・雨…など概念としてはすでに定まっている（アプリオリ）。

　「超越的・超越論的」…経験することが出来る対象は，すでに認識（主観）の形式によって規定されている現象のみであり，だから神や魂など人間の認識能力を超えたものは理解できないということ

１３．フッサールの現象学（補足）

注）フッサールの言う「超越」はカントのそれとは異なっている。

ヒューレ（感覚的所与）が，意識の作用により，意味を付与され，ノエマとして表れる。これは，あくまで意識がつくりだしたものであり，「内在的超越」であると考えた。

１４．発達障害（広汎性発達障害）（資料１５）

(1)自閉症

①　対人的相互反応における障害

例）目が合いづらい，指差し（相手の注意を自分の興味対象に向けさせる）をしない

②　コミュニケーションの障害

他人とのコミュニケーションに関心がない

例）社会性を持った物まね遊びの欠如（すなわち，模倣能力の欠如）

③　反復的・常同的な動き，かたくななこだわり

④　①～③が三歳以前に始まる

(2)アスペルガー障害（高機能自閉症とも呼ばれる）

特徴は，自閉症と同じであり，加えて

＊１　臨床的に，著しい言語の遅れがない

＊２　社会的，職業的，または他の重要な領域における機能の著しい障害

* ＊２は広汎性発達障害全般にみられる特徴

(3)ADHD（注意欠陥・多動性障害）

ADHDの治療薬（効き目順に）

（カフェイン＜）リタリン（メチルフェニデート）＜アンフェタミン＜コカイン

これらの薬は，中枢神経を刺激し，集中力を高める効果がある。

(4)自閉症の歴史

1943年　カナーが自閉症に関する症例報告

1967年　ベッテルハイムが本を出版し，そのなかで自閉症の原因は親の養育態度の酷さだとした。（まるで強制収容所のような…）→refrigerator mothers

現在　自閉症は，先天的な脳機能の障害である。

原因として，遺伝的要因も指摘されているが，まだ解明されていない。

１５．心の理論

「心の理論」＝他者の心的状態の理解，心的状態の帰属

←自閉症患者には，これが欠けている？

他者の心的状態は，直接見えない（理論）にもかかわらず，行動の原因になる。

(1)理論の進め方

類人猿＝意図を持つ，信念を持つシステムがある（前提）

では，他の個体をも，意図を持つシステムとして理解しているのか？

すなわち，類人猿は「心の理論」を持つのか？

「心の理論」がわかれば，行動の予測が可能になるはず